

# 生涯教育と自主性

足利市立協和中学校 須永隆二

1 経済行為とは欲望充足の過程だと、いわれるが、これは心理学的にいうと、自己の満足感を得るための行動だといえる。そして、その満足感は経験や環境によって変化することはいうまでもないが、日常生活を営む間に、更に新しく変化する。人間の存在とは社会とのかかわりあいの中で価値を見出すのだと私は思うが、満足感とて同様である。(そして、その中に人は自分なりの目標をたて努力する。)現代に生きる人にとっては、レヴィンの生活空間 *life space* がこれであり、コフカの行動環境がまさしくこれである。そして、人は、恐らく、この流動する社会の中であって生存競争に打ち勝たんと、より早く清勢を察知し、対応する行動を予知し、実行する事になる。外部からの刺激にうまく対応し、より豊かな生活が保障されるために、人は努力する。これが現代経済人の姿であろう。しかし、こうした競争社会は、幼い人たちにとっては、自然界のいわば嵐や荒波にもたとえられる。幼い苗木たちを何んの素地なく送り出すことは、余りにも苛酷であることは教育に直接たずさわる者でなくも親たるもののだれしも身にしみて感ぜずにはおられないことであり、教育の必要性を口すっぱく唱えざるを得なかった文盲時代に比べれば夢のようである。従って、学校教育の必要性、重要性は今こそ見をおさるべきであるが、現実には依然として学校は職業いや産業というべきか、産業予備軍の養成機関という認識が根柢よく残っているように思われる。いわゆる知識の切り売りという気分が残ってはいないだろうか、これを否定すべき根柢が積極的に見当たらないような気がする。

文部省は昨年、第四次教育改革案として、知徳体の基礎と基本を確実に見につけさせる教育等5つの柱の答申を受け、実施しようとしている。にもかかわらず最近、盛んに自然化している塾ブームは何を意味しているのか、有名私立中学に合格した父親の顔がTVでクローズアップされるにつれ、その口をついて出る言葉は東大であり、東大ある限り、苦しいこの闘いは中学1年いや有名予備校に入るためには小学校四・五年位から始まっている事実を否認なしに知らされるのである。この父親の頭の中に占めるものは徳も体もないわけではあるまい。しかし恐らく知がほとんどではないであろうか。要は有名私立中学からそのまま有名高校へ、そして東大への夢が支配をしているのではなからうか。徳や体は東大へ入ってからで良いという考えだろう。そしてそうした父親の夢をかなえてやるための塾や予備校は大繁盛で、その月謝には月、何万と支払っても惜しくないというのである。私にしても才能があれば東大は行きたいし息子にも行かせたい夢がある。それはたとえ、びりでも東大卒というレベルが今の世の中では、改めてその人柄を審査する事なく、有能な人としてまかり通るからであり、日展無審査のような、一種の保証を示すからである。それはだれの望みでもあろう。TVに出て来たこの父親ばかりでなく自分の息子こそはと、幼い者に期待しているのに違いない。しかし、東大卒ばかりでは現実の世の中は行きづまってしまうであろう。世の中には人の嫌っている職業もなくしては困ってしまう。従って、人の能力が人によって異なり、その人に応じた職業のあることはかえって好ましいことかも知れないし、自分の家の職業をついでもらいたいために東大よりも家業に就業することを願った親もあろう。かくて学校はこうした親の期待に応えるためにも現実にはその本人の個性

を生かした教育をというのが本来の教育の目的だということになる。

2 ところで、親の性格が人々様々であるように、幼児たちへの親の期待や指向は様々で、学校に入学するまでの学習効果は種々様々であろうと思われる。そのいわば教育の目標は親自身の考えであり、種々様々、不確定であるはずである。彼等は、模倣、同調等の機制を通して親に同化し行動が形成されるところの家風を背負った子供である。そして、第一反抗期において、彼らは自分の欲求を主張し、それが受容されると喜び妨げられると不満をむき出し反抗するが、わがまゝは母親によって受け入れられるが多い。このわがまゝは良くいえば、その人の個性となって発育することもある。

ところが、彼等が就学時期に達して迎えられる学校とは組織だって計画的に規律された枠の中で生活を強いられる集団である。そこには一定の教育目標が定まっており、一人の教師が数多くの生徒を、ある方向に導き指向させようと待ち受けている。彼等の欲求は自分の思うようには受け入れる余地のない秩序がある。彼らはそこで生を受けて始めてわがまゝの通らない世界を経験する。受容が今まで通り、いかなかったのである。そこでの葛藤が恐れ、怒り、わめき、泣く時の表現となるのであって入学式後、しばらく見られる小学校の風景である。この葛藤は未分化の幼光が、自己の欲求が相手に伝わらないときに、いらだつのに似ているが、幼光の世界が対社会というより自己以外のすべてを対象としているのに対して、人が家族以外の集団の中で社会というものを認知する重要な転機である。

やがて、それらのしくみは理解され、友だちと一語に在ることを好むようになる。個性がこゝで修正されるのである。

小学校ではこの時期に具体的な指導によって、もっとも教育目標にそった指導が期待できるのではあるまいか。理由は、彼等が集団的には未分化で、未だ自分の趣味や興味を特定化させる余裕がないため強力な指導で一定の方向に指向させる可能性を十分に含んでいるからであり、集団に同調することによって安定した状態になり得ることを理解しうる程度に心身がすでに発達してきているからである。

彼らは成人と異って柔直に環境の影響を受け易し、やがて集団たる学校や学級の場で「われわれ意識を発生し、自己の成員に対しては親愛と寛大さで各人の欲求を満足させあう、この意識や感情は反面その集団以外の人、特に自己の集団と対立している集団には敵意さえ抱く、私の幼い時代に旧市に五校競技会というのがあって、対抗意識をもやした記憶は未だに新しい。しかし反面どうした中に仲間との競争意識がないわけではない。書き取りでだれよりも早く出来てほめられたい一心で稽古に励んだものである。そうした競争意識は青年期になると共に益々激しく、友を選ぶには自分と同等もしくはそれ以上のものを選ぶようになる。こうした発達過程は、個性の花を咲かせると共に学習の面で次第に差を開き、出来る子は優越感に、出来ない子は劣等感にひたり、やる気をなくしていくのである。もちろん生徒の競争のみでこの差が広がるわけではない。このころ学校はその個性及び個別的能力の差に悩まされ教師は少くとも平均的生徒を対象とせざるを得ないためついには満足することなく、個性を生かすこともなく卒業せざるを得ない生徒がでてくるのである。つまりは個性を生かした教育の機能が十分発揮されないまま卒業せざるを得ないのである。

3 2月4日(金)の本校の立志式で、モンテリオール・レスリング監督・小幡洋次郎氏はその講演の中で、まず目標をつくれ、目標をつくったら完結するよう永続させよ。行き詰ったら打開策を工夫せよ。そして一生果命やれ、やれば自ら道が開かれる」と励ました。経験から割り出したとはいえ、迫力のある教訓であった。まさにこの目標とそれを達成した満足感とそれによって得た人生哲学は、現代のような人間が存在するためにせねばならぬ生きた社会に対する建設的な教養である。それにもかかわらず貴重な青春を何の目標もなく無為に過した空しさ、私は聞いている中に我と我が半生をかえりみて、あゝこんな気持ち若くして持ち合わせていたらといつか共鳴し、教育の必要性と有難さを感じた。若い時の感激は一生頭に残るものである。私たちの世代は戦争という重い苦しい時代で精神的な感激よりも常に念頭にあったのは腹一杯、食を充たすことであった。せめてもの救いは当時の小説が、現世に風びしている退廃的なものでなかったことであろう。学校が計画的に学校行事の中で立志を祝うことなんか夢のようである。従ってこういう機会を与えられた生徒がうらやましくなるわけだが、果たして、どの位の生徒がこの話に感じ、人生にそれを糧とし得るかという疑問を感じずにはおられない。というのは一年前、同氏から同じ機会に同じ話を聞いたと思われる一年先輩の上級生の行動ぶりを一年観察した様子を見ても、こうした感激を持ち合わせている生徒の存在を目にし、何にもしていないからである。もちろん生徒の内心は何い知れるはずはないから将来のことについては言い切れる自信はない。しかし日ごろの授業での反応からみても、話そのものの理解すら満足できない生徒のかなりいるのではないかと推定できる。

4 学校教育の本来の目的は、知徳体の調和と統一のある教育だと思いが、学校のあらゆる場での指導について、理解が出来ないということは、学校教育がいかに高度の目標を掲げても、空念仏に終はる恐れがあるし、教育の理想が無意味になる恐れがある。もちろん学習はレディネスがともなって始めて満足すべき効果を発揮する。従って理解という学習を効果的にするにはレディネスを高めるべく学校は努力しなければならない。ところが、画一的な教育環境にかかわらず個体の内部的変化は年を追うごとにその転差の広がりつゝある年ごろになっていることを認めざるを得ない。従って、学習の効果に個体差の生ずる事を否定できない。その効果は学業でも体育の面でも、そのころ芽生えつゝある新たな精神世界の拡大と共に社会性にも変化の多く現われる時であり、それがプラスとなったりマイナスとなったりして教育の困難さを示させる。個性が露化せんとしてうずくものころである。

従って、適切な助言によって、豊かな個性の育む余地はこの時にあるわけだが、理想であるべき教育相談が学校の忙しさの中に埋没させていくために、その機会を逸しているのもこの時機である。

このような学習の個体差や個性の差が大きくなりつゝあるにかかわらず教師が平均的の授業を続けられ、単なる学習の教授ではもの足りないとする一群と、教授が全然その存在と無関係な一群と、その相互に交わらない一群とが生じて、画一的な授業を困難なものにする。平均的なものを対象とする授業が続く限り、もの足りないものとするものにとっては時間の浪費であろうし、存在と無関係な一群にとってはその時間を耐えるのは忍耐の苦痛の時間の連続であろうし、学習は苦痛以外の何者でもない。

学校が年数的に時間的に有限である以上、そういう実態を知りつゝも、平均的の生徒を対象とせざるを得ない悩みは多くの教師にとってつきまとうのではあるまいか。しかし幸い、もの足りないもの一群は自ら学習する能力を会得していると思われる生徒たちである。従って彼らは自主的に物事を解

決して力をこの義務教育の僅かな課程でも修得している人たちであると思う。彼等のような選ばれた人たちのみを入学させた旧制の中学の姿を思い浮べれば今日、学校で叫ばれている自主性は彼らを除く平均的な者も含めた生徒にこそ必要なのだということになる。平均的な者も含めて、彼らは自らの力のみでは学習することが困難なのである。生涯教育の叫ばれている今日、生涯のあらゆる場において、このまゝでは彼らは苦杯をなめることになる。

ところで、平均的な者を自らの力で、学習できないということは識者の攻撃の的になるかも知れない。然し、これは学校という教師の教えている場では学習できるが、自らの力では多くの場合には困難であるという意味であることを御了解いただきたい。というのは、彼らは多くの場合、学習について無目的な姿勢を示しているからであり、自分自身の目標が、不確定であるからである。

ところで、これらはもちろん彼らが無能力だというものではない。それは学校で支える教授内容が彼らに親しまなかったからであり、彼等が自分の能力を別の方向に何かを見出す事ができれば、その満足する過程を、その人なりに覚ることによって目標を決定し、成功感を感じるようになれば、その人にとって幸福であるし、学校教育の本来の目的である社会の中で生きぬく能力を見につけるものと思われる。従って学校の教師はかかる観点にたつて、生徒の目標についてアドバイス出来る立場になければならない。

5) そのためには、私は教員たるもの、もっと勉強せねばならないと思う。多くの教員という誤りであるかも知れないが、一般社会から一般に疎遠で教育社会といわれる特殊社会をつくっているために、教師の社会に対する認識は机上の空論になりがちで適切な指導をしにくい面がないとはいえないからである。

たとえば資格を取得したことのない教師が、資格について教授してみたところで真味に乏しいであろう。生徒指導上、教師は生徒をよく知れ、と言われる。また知るためには教師たるもの生徒に信頼されろと言われる。それには実力のある教師たることが必要であろう。

もちろん知の面の教授に限れば、多くの生徒たちは学校の教授を消化しきれずに登下校する子供らである。我々教師はとかく教育課程を何んとか消化させねばと努力を試みてきた。しかし果たして生涯教育の中であって我々が試みるべき役割は教育課程の授業がそのすべてであろうか。生涯教育で要求されるのは教師のこのパターンから脱出して教育界という一定の枠から、とびだすことであるといわれる。

教師は今や他の大人の連中と同じで知識をもち、有能である一方ある面では無知無能でもあるという事実を謙虚に受け入れ、世の発展と共に社会の発展について学ぼうという気持ちを忘れずに取り入れるべきである。教育は生涯のあらゆる機会において学べるべきものであり、その生涯教育の中であって新しい教師の役割は知識の伝達者としての機能はその重要性からみても量的にみても少なくなるはずであるし、子供達の固有の精神や社会的意味を理解し長所を引出す事が出来るような使命をもつものと考えねばならないのである。

6) いずれにしろ、学校は序論で述べたように、知徳体の総合的な全人格の完成をその存在目的としているものと思う。従って画一と個性の伸長という相矛盾する教育の必要性を抱きつゝも、それを試行錯誤によって発展させるという任務をもつものと思う。個別化しにくい理由を認めつゝも個別化せ

ざるを得ない宿命をもつものである。社会にあっては画一的な構成員が学校で養成され送り出されてくることを望んではいないし画一的では困るのである。従って学校という一定期間の画一的教育は学校でどのような画一的目標を定めようと将来に亘って個人の固有の精神や社会的意味を拘束するものであってはならない。また自己の意思でいかなる環境にも対応し自主的に責任のある行動が選択できるような生徒に成長することを期待するものでなければならないのである。